Ⅳ　北海道へき地複式教育実践研究発表大会の記録

1　実践研究発表大会の趣旨と経緯

道へき・複連の研究は、各地区（１４支庁）の研究担当代表者と研究担当部長（副委員長）の計１５名で構成される研究推進委員会が中心となって進められている。

昭和６０年より第３次長計がスタートし、実践内容の「典型化」「定型化」をさらに進め、より確かで誰でもが活用できる理論と実践内容を構築していくために、研究推進委員会が主体となって『実践研究発表会』が設定された。その目的は、「北海道複式教育研究連盟の長期研究推進計画に基づく、実践研究の成果と課題について研究協議を行い、複式教育の充実・振興に資する」というものであった。

さらに、この会の趣旨を「道複連研究部長と研究推進委員が中心となり、全道各地で実践研究に励んでいる先生方と一堂に会し、各教育局複式担当指導主事、道教育大複式教育講座の先生方の指導・助言を賜りながら研究協議を進めるもの」として実施されてきた。

第１回目は、座談会形式による研究協議会であったが、第２回目以降は、各研究推進委員による提言発表が行われてきた。第６・７回には、研究主題に伴ったシンポジウムを行った。第１３回から、これまでの研究推進委員による発表会から、各地での実践者による発表会にし、第１４回には、名称を『北海道へき地複式実践研究発表大会』とし、参加者の拡大と質的改善を図ってきた。

これまでの提言及び資料は、111 を数える。その中で特に、「学校・学級経営」については、全校集会の典型、集合学習の典型と充実、ふるさと学習の典型、全村教育、山村留学による教育活動、道徳教育、総合的な学習と小中の連携等についての研究発表があり、「学習指導」では、同内容指導の典型、類似内容指導の典型、地域素材の教材化、個を生かした授業の創造、学習形態の典型、学習指導過程の典型、学習目標の明確化、生活科の実践例、基礎基本の定着、体験重視の教育活動などの発表がなされた。

この「実践研究発表大会」のこれまでの経過をたどってみると、次のような特徴的なことがあげられる。また、これらは成果ともいえる。

(1)　研究推進委員の自らの資質向上が図られるとともに、幅広く高い実践内容を持つ参加者との研究協議により、研究内容が深められた。

(2)　全道大会の研究内容を基に、さらに課題別に整理・統合された。

(3)　各地区における優れた研究内容を収集整理し、全道的な場に提供された。

(4)　全道各地の研究情報や資料の提供を受けることができた。

(5)　全道各地より集まった参加者により、成果を全道に広めることができた。さらに、過去の研究内容がかなり専門的に深く広く追究されて、「典型化」「定型化」の内容として活用されている。

平成２１年度より、道へき・複連の研究は、第８次長計に基づいて実施される。

今後の「実践研究発表大会」も、これまでの成果や課題を踏まえ、所期の目的と趣旨に沿いながら充実・発展させていきたい。

2　実践研究発表大会の成果と課題

（1）第２０回教育実践研究発表大会（平成１６年１０月１９日）

学校・学級経営
実践発表　1

「一人一人が考え，共に学びあえる子どもの育成」
～ 算数科を通して ～

発表者　空知地区　芦別市立西芦別小学校　教諭　横山　　通

・研究の仮説

仮説１　自力解決の力を身に付けるために：問題解決的学習を通して，一人一人が自分なりの見通しをもつことで，主体的に学習に取り組むことができるようになる。

仮説２　集団解決の力を身に付けるために：問題解決の過程で意見を交換し合うことにより，互いの良さを理解し協力して解決努力に取り組むことができるようになる。

・研究の方法

◇算数の授業で問題解決学習を中心に取り組み，学習スタイルを身に付けさせ，児童が１時間の学習の中で見通すことができるようにする。

◇一人一人が解決の道筋を考え，お互いのやり方を交流する中で，互いの努力を認め合う場面を作り，仲間同士の力を合わせて解決努力する場面を作る。

◇基礎・基本の定着に算数の問題解決的学習を含めて，様々な活動を通じて身に付けさせていく。

・研究の内容

◇問題解決的学習４つのステップ～つかむ・見通す，考える，ねり合う，まとめる

・つかむ・見通す～既習事項の復習，驚きややってみたいという興味のおこること

・自力解決（ねり合う）～発問や資料提示の工夫：絵や図に表す，算数コーナーの活用，ヒントカードの利用など自力解決における表現力の育成

・集団解決（ねり合う）～練り合い３つのステップ

ア）妥当性の検討（理解の場）

イ）有効性，関連性の検討（比較の場）

ウ）解決方法の選択（選択の場）

・算数コーナー～既習事項の展示，算数的なクイズ，ノートの展示，実験コーナー

・基礎・基本の定着～自校の３つの基礎・基本（知識・技能，学び方，コミュニケーション能力）

・成果と課題

◇問題解決学習に取り組むことによって，応用する力が徐々についてきた。

◇算数以外の場面でも，生活経験の不足を改善するように取り組んできた結果，算数の操作活動などもスムーズにでき，自力解決にも良い影響が出始めている。

◇全体的に「算数がおもしろい」という子供が増えてきた。

◇集団解決の場の保証や発表する場を多く設定することによって，意見が出るようになってきた。

◇発表の仕方が身に付いてきた。また，意見を交流し合うことで，自信をもって発表できるようになってきた。

◇課題としては，家庭との連携を深め，コミュニケーション能力の向上を図り，応用力，

思考力を一層伸ばすことである。

学校・学級経営実践発表 2

「生き生きと学び，心豊かに人とかかわり合う子どもの育成」
～ 一人一人を生かし，豊かな関わりを育む教育活動を目指して ～

発表者　日高地区　三石町立鬼舞小学校　教諭　五十嵐　重信

・研究の仮説と視点

仮説１　様々な視点から書く活動を工夫することにより，見つめる目，気づく心を養い，思いを生き生きと伝え合う子どもを育てることができるであろう。

・視点　一人一人が自分の言葉で自分の思いを素直に書き表すことができる授業の工夫

仮説２　自分の行動や体験と関連づけた道徳の時間を工夫することにより，見つめる目，心を養い，心豊かに人と関わり合う子どもを育てることができるであろう。

・視点　人との関わりを大切にし，思いやりと優しさをもつ子どもを育てる道徳の時間の工夫

仮説３　子どもの個性や変化を多面的，共感的にとらえる資質を高めることにより，自分たちの良さを認める子どもを育てることができるであろう。

・視点　児童理解を深めるための理論学習と実践

・研究の内容

〈国語〉楽しく「書くこと」に主眼をおいた国語の授業の充実

〈道徳〉行動や体験を通した道徳の授業の充実

〈児童理解〉共感的，多面的にとらえる児童理解の充実

・豊かに人と関わり合う子どもを育てるために体験を生かした道徳の授業を展開

・道徳の直接的な体験：子どもの直接体験を支えてきた総合的な道徳の展開

・道徳の学習過程を４つの過程（「描く」「とらえ」「見つめる」「広げる」）を基本とし組み立てる。

・児童の実態に即し，書く活動を工夫した国語の授業：子どもを見つめる目，気づく心を育てる。

・書くことにおける伝え合いにより，書く力を高める。

・受容や共感が生まれ，他を認め合う伝え合いができるようにする。

・指導過程を教材・学習材と出会い，書く活動への見通しをもつ段階，書く活動を取り入れた思いを表現する段階，伝え合いの場を設定した思いを伝える段階，喜びや成就感・達成感を味わい，次への意欲を高める段階の４段階と押さえた。

・国語の評価は，自校の評価基準の作成と十分な児童理解による個に応じた指導目標を明確にして行う。

・１時間ごとの具体的な評価基準を明確にし，積極的な個人内評価，個に応じた支援をすることにより次の指導に生かすことを大切にした。

・成果と課題

◇一人一人の子供たちに見つめる目，気づく目が育まれ，お互いを認め合える土壌が育ってきた。

◇考える力，表現する力が少しずつ身に付いてきたことによって，生き生きと学び，心豊かに人と関わり合うことができるようになりつつある。

・研究協議の概要

◇問題解決的な学習をどう構築する上での課題として押さえておきたい。
・子どもの自力解決で解決していったあとの交流場面
・何のための自力解決だったのか，何のための問題解決的な学習であったのかということが子供たちに落ちないまま終わってしまうことが多い
◇問題解決の学習の充実では，子どもの思考過程にいかに寄り添っているのかということを先生がとらえていなければならない。
◇先生方の日頃の組織的な教育力の育成の努力も必要。

学習指導実践発表 1

「自ら創造的に学び，豊かな心で故郷オホーツクを拓く子供の育成」
～ へき地複式校の特性を生かし，
個性を伸ばしながら生きる力を育む学習指導を目指して ～
発表者　網走地区　常呂町立日吉小学校　教諭　大西　修治

・集合学習の目的

◇「２校児童の交流」を通して，「刺激と競争心」をもたせ，「考え方の広がり」を促し，学習意欲の向上，社会性や協力性，認め合う気持ち，豊かな心の育成を図る。

・集合学習の内容

◇小規模校２校だからこそできること，そして，１校では困難な授業形態に対応すべく「道徳」「音楽」「体育」を低中高学年別に行う。
◇「町複連水泳大会」「スケート交流会」を行う。

・目指すもの

◇道徳～価値観の異なる考え方をもつ者同士が互いに意見を交流し合うことにより，児童一人一人が自分自身をふりかえり，考えを深めることができるようにする。
◇音楽～普段の学級とは違ったメンバーで歌ったり演奏したりリズム遊びなどをすることにより，お互いに刺激を受け，音楽的な感受性を広げることができるようにする。
◇体育～普段と違うメンバーでボールゲームなどを行うことにより，ゲームへの意欲が増し，普段以上の運動能力を発揮することができるようにする。
◇学習発表～大勢の前で発表する体験活動を通して，自分が思ったことを恥ずかしがらずに堂々と発表する態度を育てる。
◇水泳大会・スケート大会～①学校間の交流を深め，お互いの良いところを学び合う機会とする。②水泳学習・スケート学習で学んだ成果を発表する場とする。③お互いの健闘をたたえ合い，楽しく参加する態度を育てる。

・成果と課題

◇道徳～多様な考え方が出て，練り合いが深まった。また，学校の雰囲気や地域により微妙に価値観が異なることも深く考える際に役立った。
◇音楽・体育～子供たちは，普段以上に生き生きと活動できていた。単なるゲームではなく，学習として多くのことを得られたのは大きな成果である。
◇学習発表～音楽授業の成果を交流したのが良かった。高学年の発表が低学年に感動をもたらせた。短い時間で感想を考え，自分の言葉で発表できる子が増えた。発表の仕方が着実に身に付いている。

学習指導
実践発表 2

「自ら学ぶ意欲を持つ子の育成」
～ 地域の教育資源を活用した教育活動の推進 ～

発表者　胆振地区　早来町立富岡小学校　教諭　大岸　克洋

・研究の仮説

仮説１　地域の自然や人間，社会，伝統文化，産業などとふれあう体験を重視する教育活動に参加することによって郷土への理解と愛着が深まり，自ら意欲を持って学ぶ子を育てることができるであろう。

仮説２　自らの課題を解決させる学習指導の工夫によって，意欲的主体的に学習に取り組み，自らの思いを表現して，楽しく学び合う子を育てることができるであろう。

・具体的研究内容

視点１　豊かな体験活動の充実～ｉ）教材の開発と工夫，ii）体験活動を推進する上での地域や関係機関との連携の在り方

視点２　自らの課題を解決させる学習指導法の工夫～ｉ）学習過程の改善と定着　ii）問題解決的な学習，課題別学習の工夫　iii）表現力を育成するための教師の支援の在り方　iv）評価方法の改善

・成果と課題

◇地域に誇りをもち，地域を大切にしたい，もっと知りたい，他の人にも知らせたいという思いをもつ子が多くなってきた。
◇ふるさと学習推進委員会を通して，地域の情報が取り入れやすくなった。
◇学習を通して子供たちは多様な解決の方法を見つけられるようになってきた。
◇地域素材を生かした学習を今後更に広げていきたい。

・研究協議の概要

◇網走の発表に関わって
・集合学習で一番大事にしたいのは，集合学習をする意義をきちんと押さえることである。教師の役割分担をはっきりさせることで，子供たちを教師全員で見る授業を構築することができる。
◇胆振の発表に関わって
・農園活動では，地域の高齢者に来ていただいているが，学習にどう位置づけるかを考えなければならない。

助言の概要

◇集合学習の目的は子ども同士の親睦と友好と拡大を図り，子どものものの見方や考え方を広げ，深めると同時に，教師の共同研究を充実していくということである。実際に集合学習を行うメリットは，①教師一人ではできないような綿密な計画の作成が可能②それぞれの教師の専門性を生かしてより研究を深めることができる③複数の教師の個性や個人差に応じた指導ができる④教科の研究を深めることができる，ことにある。
◇開かれた学校作りについては，どのように開いていくのかが，どの学校にとってもこれからの課題となっている。学習活動や評価などの絶対必要な情報がきちっと伝えられているか，今提供している情報が絶対必要な情報なのか，補助的な情報なのかをしっかり吟味する必要がある。

（2）第２１回教育実践研究発表大会（平成１７年１０月１８日）

学校・学級経営実践発表 1

「主体的に学ぶ創造性豊かな児童の育成」
～ 地域を見つめ自己を見つめる『礼受タイム』の創造 ～
発表者　留萌地区　留萌市立礼受小学校　教諭　塩田　　晃

・研究の仮説

仮説１　地域の素材を適切に題材化することにより，児童の主体性を高めることができる。
仮説２　教科・道徳・特別活動との関連を深めることにより，児童の創造性を高めることができる。
仮説３　長期的な視点に立って支援を継続することにより，児童の生きる力を高めることができる。

・研究の視点と内容

◇地域素材を生かした題材設定…地域を見つめる，地域から見つめる，自己を見つめる
・礼受タイム　　・英語タイム
◇教科などの基礎基本と創造性の関連を図る学習活動の構築
・基礎基本の押さえと定着を図る方策　　・創造性の押さえと伸長を図る方策
・評価の観点・規準作り　　・各教科，道徳，特別活動を関連づけた学習活動
◇自己実現を目指す，継続的な学習活動の構築
・ポートフォリオを活用した学習の蓄積

・成果と課題

◇地域の素材を環境教育・国際理解教育の観点から関連づけて題材化したことにより，長期にわたって柔軟に研究活動を続けることが可能となった。
◇歌やゲームを取り入れた楽しい英語活動を展開することにより，児童の英語に対する興味・関心が高まり，英語に慣れ，意欲的に活動することができた。
◇ネイティブスピーカーとのふれあいが児童にとって貴重な体験となった。また，教師のコミュニケーション能力も向上し，意識の改革が図られた。
◇異文化を知り，文化の違いに関心をもち，それぞれを大切にする気持ちを育てることができた。
◇英語タイムは保護者にも参加の機会があるため，活動内容が良く理解されており，特色ある教育活動として期待されている。
◇少人数のメリットを生かし，個に応じた評価，支援を行うことができた。
◇中学校と交流し，小中学校それぞれの英語活動についての理解を深めていくことが望ましい。

学校・学級経営実践発表 2

「地域に学び，主体的に活動する子どもの育成」
～ 地域の特色を生かした学習指導を通して ～
発表者　上川地区　士別市立中多寄小学校　教諭　加藤　久貴

・総合的な学習の時間のねらいと活動計画の作成について

◇全体の目標から，ブロックの目標，学年の目標を明確にし，目標に沿った学習計画を立てるようにする。
◇各ジャンルと年間指導時数
（福祉：２０時間，環境：３０時間，農園活動：３０時間，英語活動：１０時間
学級テーマ：中学年１５時間・高学年２０時間
合計：中学年１０５時間，高学年１１０時間）

・研究の内容

◇地域の素材を活用した実践
◇地域の人材を活用した実践
◇地域との繋がりを深める実践

・成果と課題

◇地域の自然を愛する気持ちや環境に働きかけていくことのできる子どもの育成ができた。
◇地域の産業に愛着をもち，自分の生活を考えるようになった。
◇地域の人々との繋がりの中で，主体的に活動できる子どもの育成が図られた。
◇地域の人々との繋がりをより一層深め，三特性のよさを生かした学習内容の開発につなげたい。

・研究協議の概要

◇留萌市立礼受小学校の発表に関わって
・環境教育の観点から，過去，現在，未来へと地域を見つめ，国際理解教育の観点で地域から国際社会を見つめるようにしている。地域素材を使って毎年実施するにあたっては，テレビ番組や新聞資料，インターネットなどの情報・話題に目を光らせて収集し，その時々の要素，切り口で子どもに返している。
・英語タイムでは，学年，単元，本時の目標，指導案はその都度積み上げて作成していくことが必要。
◇士別市立中多寄小学校の発表に関わって
・地域素材を取り上げるとき，自分自身がおもしろいといえることが大切。マンネリ化しないように教師は鳥の目で見直す必要がある。自分の暮らしの中に子どもと学ぶ素材をとっておく。日常が教材研究であり，地域素材の開発は子供たちに何か活動を作る前に自分がおもしろいと感じることから始まる。

・助言の概要

◇現在の自分の居場所をベースとして，子どもの身の回りが広がる学習場面が設定・展開されている。課題も段階的に設定されていることがよい。
◇英語活動については細かな記録がなされているが，教師側の評価も蓄積していくと良い。
◇活動を地域に発信し，地域の評価を受けることが子供たちの意欲化につながっている。
◇単元の計画の中に学年ごとの評価規準が設定されていると良い。
◇地域連携のシステム作りがへき地・複式校では必要であり，一人一人の先生に任されるのではなく，校内組織として位置づけられることも大切。
◇学校も教師もオールマイティではなく，地域，家庭，学校の三者の役割分担を明確にすることが信頼を強くしていくことにもつながる。
◇総合的な学習の時間で身に付けさせる力とは何かを明確にすることが大切であり，子どもの成長で成果としてはっきり示す必要がある。

学習指導 実践発表 1

「わかる喜びを大切にし，基礎・基本の定着を図る授業をめざして」
～ 効果的な複式の授業の工夫 ～
発表者　釧路地区　釧路町立知方学小学校　教諭　大西　義仁

・研究の仮説

仮説１　児童の実態を的確に把握し，学習を進めるために必要な学び方を身に付けさせることにより，個に応じた学習が成立し基礎・基本的な内容を定着させることができる。
仮説２　既習事項を活用させ，算数的活動を多く取り入れて多様な考え方を引き出し，それを交流し合うような授業を実践することにより，個に応じた学び方ができ，

算数の楽しさや良さを味わうことができる。

・研究の内容

◇基礎・基本の定着

・問題解決的な学習（学び方）を取り入れ，同時間接指導の学習展開を可能にする。
・朝学習の時間（１０分間）に漢字ドリル，読書（金曜日），計算などを行う。
・授業開始後，１分間を使って計算ドリルを行う。
・パソコンで算数関係のソフトを，朝，放課後，休み時間に行う。
・算数の授業で学習したことを発表するコーナーを体育館前に設置した。

◇学年別指導における工夫

・単元導入時に直接指導を必要とする時間が多くなるので，単元の導入をずらす。
・１単位時間の学習過程（課題把握，解決努力，定着，習熟，応用）の組み合わせを工夫する。ⅰ）Ⅰ型Ａ（複式基本形＝ずらし）　ⅱ）Ⅰ型Ｂ（ずらし変形～片学年の解決努力の時間が長い）　ⅲ）Ⅱ型（両学年課題把握から同時展開）　ⅳ）Ⅲ型（特殊型～片学年習熟・応用のみ）　ⅴ）単元の構想～Ⅰ型Ａ，Ⅰ型Ｂ，Ⅱ型，Ⅲ型を単元の中に組み入れる。
・個に応じた指導の工夫

・成果と課題

◇算数に対する抵抗感が薄くなって興味をもつようになり，理解力も伸びてきた。
◇朝学習や１分間ドリル，パソコンの利用など，楽しんで計算などのドリル的学習をするようになり，表現・処理能力が高くなってきた。
◇問題解決的な学び方が身に付き，既習事項をもとに自力で課題解決しようとするようになった。また，交流場面での練り合いもできるようになってきた。
◇簡潔で子どもを引きつける課題作り，わかりやすい提示の仕方，児童が自ら課題を見つけられる方法の工夫
◇社会科や理科における学年別指導のための問題解決的な学び方や複式授業の効果的な進め方

学習指導
実践発表　2

「主体的に学習課題に関わり，追求・解決を試みようとする子どもの育成」
～ 地域に根ざした総合的な学習 ～

発表者　十勝地区　上士幌町立萩が丘小学校　教諭　大山　七雄

・研究の仮説

仮説１　地域に根ざした教材（歴史，自然，文化，人材など）を取り入れることにより，児童の興味・関心を高めることができるであろう。
仮説２　各教科などとの関連を図りながら，児童の興味・関心をもとにして児童自ら課題を設定し，追求していく学習を進めることによって，主体的な学習を進めることができるであろう。
仮説３　児童のつまずきを大切にし，適切に支援することによって，主体的な学習方法を身に付けることができるであろう。

・研究の内容

◇総合的な学習の時間『わくわく研究』のカリキュラム編成・実施

・『わくわく研究』の目標設定及び「全校わくわく研究」「学級わくわく研究」「学び方わくわく研究」の３領域の設定
・「全校わくわく研究」：老人ホーム訪問や農園活動等，体験的活動，地域の人や自然と関わる活動を通して，思いやり，主体的な追求力，表現力，協調性，高学年のリーダーシップの育成・向上をめざす。
・「学級わくわく研究」：発達段階を踏まえて地域素材と対面させ，五感を使った学習

を通して，課題設定力，課題追求力，表現力の向上を目指す。

・「学び方わくわく研究」：情報収集の方法や資料の読み取り方など，課題追求活動や表現活動を支える基本的な方法の定着を目指す。

◇評価について

・「総合的な学習の時間のねらい」「わくわく研究の目標」を踏まえ，５つの評価の観点（「課題解決の能力」「表現する能力」「学び方・ものの考え方」「学習への主体的，創造的な態度」「自己の生き方」）を設定し，それぞれの評価基準を作成した。

・「評価補助簿」や「ふりかえりカード」を作成し，児童の良い点や進歩の状況など，指導の過程や成果を評価し，指導の改善を行い，学習意欲の向上に生かす。

・成果と課題

◇地域素材の教材化を通して，子供たちの活動意欲が喚起され，身近なものに対して理解や親しみをもつことができた。

◇各教科や総合的な学習の時間に身に付いた内容を相互に生かせるようになった。

◇個に応じた支援を細やかに行い，児童に満足感や達成感を味わわせることができた。

◇全校活動を通して，異学年交流が活発化し，教え学び合う姿が多く見られるようになった。

・研究協議の概要

◇釧路の発表に関わって

・Ⅲ型（特殊型～片学年習熟・応用のみ）を効果的に行うために，年間指導計画の中で行うところを決めている。ずれた場合，Ⅱ型（両学年課題把握から同時展開）でもできる。Ⅳ型として，両学年共習熟・応用という場合もある。

◇十勝の発表に関わって

・上士幌町では，東大雪国立公園を学びの場として，東大雪自然ガイドセンターが町内小中学校の自然環境教育事業を推進するよう町が支援している。地域特有の素材を地域ぐるみで取り組むことにより，成果が一層期待できる。

・評価の観点としては，「学級わくわく研究」の２回目の活動において，誉めることを中心として行うため，子供たちの僅かな成長をも見とることに心がけたことにより，活動の意欲化や追求力，表現力の向上が見られた。

・助言の概要

◇釧路の発表に関わって

・子どものことを一番に考えて意欲的に取り組まれてきた。型に慣れていない先生もいるので複式の指導過程の型を作ってそれを明確にしている。問題解決的な学習の充実を図っていくと，子どもが学ぶ喜びの実感をとらえた学びができる。学ぶ意欲を育てる「できた」「わかった」自己評価が大切になっていく。

◇十勝の発表に関わって

・地域資源を有効に活用，地域との連携を大切にした実践。確かな学力の育成について，生活科・総合的な学習の目標，児童の発達段階を踏まえた上での「全校わくわく研究」における児童の目指す姿を明確にしていくこと，そのことで評価・支援の在り方が一層充実してくる。

◇両校に関わって

・体験的な活動や日常生活と知的学習との関連を図り，学習が好き，楽しいといえる子を育てるため，学びの実感を味わわせる教育活動の展開の充実を期待。

・教える場面，試行をさせる場面を適切に展開するため，職員の組織的，計画的指導が必要。少人数の特性を生かし，きめ細かな指導で一層の教育課程の充実が大切。

（3）第２２回教育実践研究発表大会（平成１８年１０月１７日）

学校・学級経営実践発表 1

「礼文町教育研究の活性化と研修活動の充実」
～ 保小中高連携を核にして ～
発表者　宗谷地区　礼文町立香深井小学校　教頭　大島　　朗

・平成１７年度宗谷複式研究大会・礼文町教育研究大会合同大会の取り組み

◇複式校４校が公開し，パネルディスカッションでは「学校と地域の信頼関係」「小中高連携」が語られ，「連携」特別分科会が設立され，実践交流が行われた。町外から１００名を超える参加があり，今後の教育研究の方向性を確かめることができた大会になった。

◇小中高の連携を通して，それぞれ自校の教育課程が評価･改善され，そのことと連動するように礼文町研の運営や組織の改善につながっていった。

◇町内のすべての教育関係者が「小中高の連携」の重要性を認識し，共通認識に立つことができた。「礼文町教育研究会」では，２１世紀礼文の教育発展に貢献できる「改革基本案」をもとに改革に着手した。

・保小中高による教育連携

◇礼文町のすべての子どもの基礎学力向上を目指す「礼文検定」の推進
・「総合的な学習の時間」で小中高の体系的学習「ふるさとに学ぶ礼文学」の推進
・複式教育部会の充実と単式校との交流
・礼文高校の町研参加
・保育所との連携

・研修向上を図る学校の取り組み

◇教育活動の充実と資質能力の向上をめざした研修として,次の４点を大事にしている。
・計画的に研修を進める。
・互いの意見を出し合える会の運営を工夫する。
・「開かれた学級」をキーワードに，授業を積極的に公開していく。
・公開後，授業者と参観者でミニ事後研を行う。

学校・学級経営実践発表 2

「地域に学び，豊かな心を育む教育活動を目指して」
～ 出会い・ふれあい・学び合いの活動を通して ～
発表者　渡島地区　松前町立原口小学校　教諭　吉田　実千代

・かけこしタイム（総合的な学習）

◇総合的な学習の時間を全校の取り組み（３６時間）と各学級の取り組み（中学年６９時間，高学年７４時間）とに分けて活動を展開している。全校の取り組みでは，主に地域の人々とふれあい，地域の素材から学ぶ活動を取り入れている。

・ふれあいトーク集会

◇地域のいろいろな方をゲストティーチャー（講師）としてお招きし，子どもたちが地域の歴史や文化を学び，理解や愛着をもってもらいたいという目的で取り組みが始められた。

〈ふれあいトーク集会の学習形態〉
・ゲストティーチャーのお話を聞く～（例）「産婆さんのお話を聞こう」
・ゲストティーチャーと体験する～（例）「縄ない体験」
・ゲストティーチャーにお礼をする～（例）「感謝の集い」

・成果と課題

◇交流が深められ，地域と子どもたちの関係がさらに密接になってきた。
◇地域の方々や地域に対する尊敬や感謝の気持ちが子どもたちの中で育ってきた。
◇感想発表やお礼の手紙などで，子どもたちの表現力が少しずつ向上してきた。
◇地域を身近に感じ，学ぶ材料や人材を子どもたち自身が把握し，進んで学んでいこうとする姿勢が見られるようになってきた。
◇地域の良さを再確認し，素材や人材を再構成する必要性がある。
◇三特性を有する地域ならではの教材開発を行い，子どもたちが「生きる力」を身に付ける学習内容を今後も考えていく必要性がある。
◇「体験ありき」に陥ることなく，子どもたちにどんな力を付けさせたいかを考えながら，今後も到達目標をしっかり設定し，計画的に取り組んでいく。

・研究協議の概要

◇礼文町立香深井小学校の発表に関わって
・礼文検定は，香深中学校で行っていたものを拡げた。ベースは教科書の問題で，作ることを通して実態交流を行った。使い方は各学校に任せ，自校の評価改善に生かしていく。
・礼文学などの地域学を継続発展させるためには，町研への位置づけが大きい。組織的運営ができ，資料もそろえておくことができる。他の機関とも連携を図るなど継続的な戦略が必要である。
◇松前町立原口小学校の発表に関わって
・ふれあいトーク集会で神楽に取り組んだことにより，子どもたちが興味をもって保存会に入ってやったり，挨拶や礼儀が身に付いてきたこと，また，郷土の誇り（郷土に愛着をもつ）が身に付いてきたことが成果として，さらに挙げられる。
・「体験ありき」に陥ることなく，子どもたちに付けさせたい力を考えて行っていくことが大切である。

・助言の概要

◇礼文町立香深井小学校の発表に関わって
・教師間，校種間のスムーズな接続。教育課程レベルでは連携。特に，小中での連携は段差を無くすということで素晴らしい。
・教育課程の充実。「礼文学」の一つ一つの学習に力を入れてほしい。
・保小中高１５年の一貫した実践を続けてほしい。そして，広く発信してほしい。
◇松前町立原口小学校の発表に関わって
・豊かな心の育成を中核にすえた実践であった。資料４ページの「わくわく」「ドキドキ」という新鮮な気持ちがキーワード。
・総合的な学習の時間の目標が一部改正により一層明確になった。かけこしタイムの全体計画で各教科との関連がきちんと示されている。
・生きる力を育成するための体験活動は，知の総合化が図られている。「言葉」と「体験」が盛り込まれている。

学習指導実践発表 1

「主体的に問題解決に取り組む子どもの育成」
～ 算数科の授業改善を通して ～
発表者　石狩地区　石狩市立厚田小学校　教諭　東　　陽三

・研究の仮説

仮説１　問題解決の学習過程を通し，算数的活動を取り入れた授業づくりを行うことによって基礎基本が身に付き，主体的に取り組む子どもを育成することができる。

仮説２　子どもの学びの評価を適切に行うことによって，自信をもって問題解決に取り組み，主体的に取り組む子どもを育成することができる。

・研究の内容

◇主に授業作りに関して（教育課程の整備等）
・算数科教育課程の編成と授業改善（年間指導計画）
・算数的活動を取り入れた授業実践
◇主に評価（学びの見取り）に関して
・学習カルテにおける基礎基本（習熟度）の把握
・学習のルール（ことばを大切にした）の確立と授業実践

・成果と課題

◇一人一人にねらいを達成させるために，子ども一人一人を確実に見とる必要性と，きめ細やかな計画と指導の必要性が明らかになった。
◇子どもたちが進んで学習に取り組む姿やしっかり考える姿が日常的になってきた。
◇個々の習熟度の違いが大きくなってきている。

学習指導
実践発表　2

「人間性豊かでたくましく生き抜く力を育み，主体的・創造的に学ぶ子どもの育成」
～ 国語科の「読むこと」の授業を窓口にして ～
発表者　檜山地区　上ノ国町立早川小学校　教諭　吉田　純代

・研究の仮説

仮説１　各学年の「読むこと」の力を明確にすることにより，系統性をもった指導ができるであろう。
仮説２　目的意識をもった「読むこと」の指導をすることにより，国語を正確に理解する能力が育つであろう。
仮説３　少人数学級の特性を生かし，個に応じた指導をすることにより，確かな「読むこと」の力が育つであろう。

・研究の内容

◇学年に応じた「読むこと」の力の明確化
◇目的意識をもたせる「読むこと」の指導方法の研究
◇児童個々の実態を踏まえた指導方法の研究

・成果と課題

◇「読むこと」の力を伸ばすため，学級の実態，個の実態に合った学習指導ができた。
◇１人学年の難しさを克服するための授業の形態について研究を深めることができた。
◇「読むこと」に重点をおくことで，「読んで理解する」という意識を高めることができた。
◇「読むこと」が内容理解につながるように読み取る力を伸ばしていくこと。
◇友達との関わりから学ぶことが難しい現状ではあるが，様々な授業形態を取り入れ，自分で気づき理解を深められるような工夫をしていくこと。
◇「読むこと」の力を培い，進んで読書する子どもを育てること。

・研究協議の概要

◇石狩市立厚田小学校の発表に関わって
・学校の構造を一本化して，教職員が常に学校課題を意識することにより，全ての教育活動が学校教育目標達成に向けられる。
・算数科の基礎・基本をＡＢＣの三段階に押さえ，Ｂを最低基準として確実な定着を図る事を目指し，個人差に対応し高い基準を目指してほしいという考えで行ってい

る。

・全部の子に同じ規準で評価していくと，個別の評価が難しくなる。各時間の中で本時の学習のねらいの達成度を，四観点から選んだ一つの観点についてチェックし，その累積により単元全体を通して四観点の力が評価できる。

・算数的活動を取り入れることにより，教師の説明中心の授業から子どもが主体的に活動し，考える授業への転換が図られる。また，子どもが学んだことを実生活で使うことができ，算数の楽しさを実感できる。ねらいをしっかりもって行わせることが重要である。

◇上ノ国町立早川小学校の発表に関わって

・国語科の学習の中で，目的意識をもった「読むこと」の力を育てることにより，わからないことを児童が自ら調べたり，それをまとめたりする力も培われる。総合的な学習の時間だけでなく，他の教科や日常の諸活動の中でも表れてくる。

・同時間接時・直接指導の裏に行っている『こわたり』は，必要に応じて，また自学する中で支援する時間となる。子どもたちが困るところを事前に予想し，見通しをもって授業を組み，こわたりを活用することが大切である。

・助言の概要

◇石狩市立厚田小学校の発表に関わって

・「よい循環」という観点で取り組んでいるが，目標を１時間ごとの目標に置き換えたときに，その授業がどうなのかという見方をすることも可能である。

・算数において，主体的な子どもを育てたいというときに，問題解決的な学習を行うことが大前提になる。それを充実させるとともに，子どもたちが意見を言い合い，練り合っていく中で，表現力も育てていくという視点をもって進めてほしい。

・単元指導計画の中で児童の記録を○，△だけでなく書き込みをし，あわせて個人の学習カルテを作成し活用していることが子ども一人一人を見取るということで大きな成果を上げている。そのとき，書かれている反省をねらいに照らしあわせることで改善点が明確になる。

◇上ノ国町立早川小学校の発表に関わって

・国語は学年別指導が広がっていない状況にあるが，一人一人の実態からスタートしようと，目標を立てて行っている点は評価できる。

・本時の目標を吟味することにより，授業の内容はさらによくなる。１時間１時間で何をねらうのかをより明確にし，手立てをはっきりさせることで授業の改善を図ることができる。

◇両校の発表に関わって

・一人一人を伸ばし生かすための授業の改善のために，児童の実態を踏まえたその時間の目標の吟味が大切。その上で目標達成のための手立てを研究の中で明確にしていってほしい。

・評価では，十分に満足できないと判断される子どもについての支援を明記し，教師の意識付けをはっきりさせて授業改善を進めることが大切。それを子どもの変容とともに記録化することが，子どもの育ちを明確に見とることになる。

・研究主題に対して，それを達成するための研究仮説が明確になっているかを吟味してほしい。仮説が明確になれば，おのずと研究内容も明確になり，結果の検証も容易になる。

（4）第２３回教育実践研究発表大会（平成１９年１０月２３日）

学校・学級経営 実践発表 1

「気づき・考え・行動する，心豊かなたくましい子どもの育成」
～ 地域と連携した教育活動の充実 ～
発表者　空知地区　新十津川町立花月小学校　教頭　佐々木　祐治

・研究課題

◇地域の教育課題をふまえ，家庭・地域とともに「豊かな心」を育む教育活動の推進を図る。
・家庭や地域と連携し，豊かな心を育む学校・学級経営の在り方
・道徳的実践力の育成を目指す道徳教育の計画など，豊かな心を育成する学校・学級経営の在り方

・研究内容

◇「豊かな心を育む教育活動の推進」の実践
・家庭・地域と連携を深めながら，「総合的な学習の時間」を中心に「特別活動」「教科」「道徳」が，地域社会を仲立ちに総合的に密接な関係をもちながら，実践を進めてきている。
＜総合的な学習の時間＞
・栽培学習及び収穫祭～ＰＴＡ，スーパーアドバイザー(老人クラブ)の支援
・田んぼ体験隊ファーム　・新十津川農業高校体験学習　・特別養護老人ホーム訪問
＜特別活動＞　・平和人権集会～出前授業，調べ学習等　・交通安全教室，街頭啓発
・読書集会，昔の遊び集会
＜教科＞　・教材園，田んぼ観察，桜の実生苗事業～関連機関，保護者，地域住民の協力
・食育の学習～バイキング給食，栄養教諭，町栄養士等との連携
＜道徳＞　・自然体験やボランティアなど，多様な体験活動から道徳性を養う。
・地域人材，組織，施設等「地域との連携」から，子どもたちが豊かな人間関係を形成できるようにする。

・成果と課題

◇「豊かな心」を育むための保護者や地域の人材・施設・組織と連携した教育活動は大きな成果を上げ，協力体制が整ってきた。さらに「豊かな人間関係を形成する力」の育成を図っていきたい。
◇新十津川町内の小学校全てが平成２０年に閉校し，平成２１年度に新しい小学校が開校する。それぞれの小学校が取り組んできた「地域との連携」をどの領域で，どのように生かすか，町全体が大きな課題に取り組んでいる。

学校・学級経営 実践発表 2

「生き生き，のびのび，ふるさとにかかわり，心豊かに活動する児童の育成」
～ ふるさと学習（総合的な学習の時間，生活科）を通して ～
発表者　後志地区　真狩村立御保内小学校　教諭　風間　直樹

・研究の仮説

仮説１　体験学習の内容を吟味し設定すれば，自ら学ぼうとするようになるのではないか。
仮説２　表現力，発表力をつけ，自らが次の活動へとつなげていくのではないか。

・研究の内容

◇ねらいから目指す子ども像，指導の重点をそれぞれ具体化し，本校の評価規準に照らして身に付けたい力として４点設定した。
・見つける　～　身近な事象に興味・関心を抱き，課題を見つける力
・調べ・考える～解決方法の見通しをもち，多様な方法で調べ，その結果を比較，関

係づけて，多面的に考える力
・伝える　～　調べ，考えた過程や結果をわかりやすくまとめ，伝える力
・生かす　～　日常生活の問題場面で学んだことを行動に移す力
＜心豊かに活動・表現する児童の育成＞
・４つの基本段階を押さえた上で，子どもたちの見つけた課題の中から学習を展開
・地域参観日等での発表
・学習記録の作成　～　児童の振り返り，次時への活用
＜ふるさと学習の年間計画＞
・学校行事や体験学習の充実を意識し，ねらいと意図を明確にした年間計画を作成
・出前授業や積極的な校外活動によって，外部の人と接することに取り組んだ
・外部の人との接し方，調べ・まとめる仕方など，必要となるスキルを明確にした
・食育・食農を中心に取り組んできた～子どもたちが栽培したものを活用

・成果と課題

◇学習活動に流れをもたせ，段階的に進めることにより，子どもたちに学び方・進め方を身に付けさせることができた。また，地域素材を活用した学習内容は，子どもたちにとって活動の意欲づけ・活動のし易さの面で有効であった。
◇地域から学び，地域に伝える活動をより展開できる教職員の研修の必要を感じた。

・研究協議の概要

◇地域，外部団体との窓口は教頭が行うが，取り組みを重ねることでスムーズに連携することができるようになってきた。資金面でも町などからの助成が生かされている。
◇学校の地域性，特色を生かし，「何を，どのように」実践するかが重要。また，地域産業を生かし，どんな子どもに育てていくかを共通にすることが求められる。
◇地域の中で子どもが学び，それを生かして地域から出たときにもたくましく生きていく力を育てたい。そのためにも，学校の教育目標の達成を柱に考え，学校が主体性，自立性をもって取り組むことが大切である。
◇地域講師に共同者として参加していただくことで，指導者の育成にもつながると共に，子どもたちにも感謝の気持ちが深まってきた。

・助言の概要

◇自然や人との係わりを中心とした，数多くの積み上げられた実践の中で活動できる子どもたちは大変幸せである。「わかりやすく」「道筋をはっきり」という取り組みは，学校全体での取り組みを推進する上で大変重要なことである。
◇生活科，総合的な学習の時間の今後の動向
・総合的な学習　～地域の人々の暮らし，文化・伝統に関する学習を例示に加える
・生活科　～自然の不思議さ，おもしろさを実感する
＜視点＞
ⅰ）教育課程と学習活動の工夫 ～ ㋐ねらいを明確化㋑事前事後指導の充実
㋒適度な困難
ⅱ）三特性を生かした教育活動 ～ ㋐自然・伝統・文化㋑機動力の発揮
㋒リーダーシップとフォロアーシップの体験
ⅲ）家庭，地域との連携 ～ ㋐事前打ち合わせ，学校の主体性㋑学校評価の活用
ⅳ）評　価 ～ 多様なよさを多角的に見取り，伸ばす評価・・・個人内評価の重視

学習指導実践発表 1

「分かる喜びを味わい，確かな学力を身につける子どもの育成」
～ 基礎・基本の定着を図る算数科学習を通して ～
発表者　根室地区　別海町立美原小学校　教諭　佐野　達也

・研究仮説

仮説　算数科において基礎・基本の定着を図る指導を試みる中で，次のような手だてを

講じれば，分かる喜びを味わい，確かな学力を身に付ける子供を育成することができるであろう。
ア）基礎・基本の定着を図るための指導方法の工夫　イ）個に応じた指導方法の工夫　ウ）学習過程や教材の工夫　エ）評価方法の工夫

・研究の内容

◇身に付けさせたい基礎・基本の明確化，定期的・継続的なスキルの場の設定と活用
◇個に応じた効果的な支援の工夫，学習形態の工夫，発展的・補充的な学習の取組
◇課題提示の工夫，効果的な「わたり」「ずらし」，教材教具の工夫と活用
◇レディネステストの実施，自己評価と相互評価，学力調査・意識調査の実施と分析

・成果と課題

◇子どもの実態調査で，「計算力が上がったと思う」子が増えている。ＣＲＴ学力検査の結果でも「表現・処理」「知識・理解」「数と計算」のポイントが上がった。
◇個に応じた指導の充実によって，学習に集中して取り組む姿が見られた。
◇自己評価を毎時間行うことによって，提出時にフォローしたり，次時で配慮したり指導の手だてに役立てることができた。また，教師の見取りと子どもの思いの違いを発見でき，子どもの実態把握ができた。
◇個に応じた指導の充実をさらに図ること。
◇興味関心を高める課題の工夫，教材・教具の開発にさらに努めること。
◇自己評価を授業に生かし，自己評価力を高め，自ら学ぶ態度を育てること。
◇「数学的な考え方」の力をつける指導の充実を図ること。

学習指導
実践発表 2

「自ら学び，確かな学力を身に付ける子どもの育成」
～ わかる算数の授業づくりを通して ～
発表者　胆振地区　白老町立社台小学校　教諭　山田　健太郎

・研究の仮説

仮説１　学習の基礎となる技能の定着のため，ノート指導や基礎学力指導を徹底し繰り返し練習することにより，確実に学習を進める力を育てることができるであろう。
仮説２　算数的活動を多く取り入れ体験的・能動的に学習することにより，数・量・図形の概念が育ち，自ら考え，問題を解決する力を育てることができるだろう。
仮説３　評価を適切に行い，支援援助を効果的に行うことにより，子どもが自分自身を見つめ，進んで学ぶことができるだろう。

・研究の内容

◇基礎学力定着の取組・ノート指導・算数授業のパターン化
◇算数的活動の設定と活動への意欲化，見通しをもたせる工夫，まとめる段階の工夫
◇適切な評価基準の設定，指導と評価の一体化，補充的・発展的学習の実施，自己評価の工夫

・成果と課題

◇自分で考え解決する学習形態が定着し，主体的に学ぶことを通して自分の力を伸ばそうとする意欲が育ってきた。また，基礎計算の繰り返し練習により，自力解決ができるようになった。
◇具体物を使ったり，体験的な学習を取り入れたりすることで，算数の学習と生活へのつながりが実感できた。
◇発展的な学習を取り入れることで，上位の子が自分の考える力を高め，苦手な子はじっくりとまとめの練習に取り組めた。
◇評価を指導に生かそうという意識が教師側に高まり，つまずいた子どもへのケアがスムーズにできるようになった。

・研究協議の概要

◇別海町立美原小学校の発表に関わって

・「道場の時間」を設定した基礎学力の向上の取組は，子供たちの自主的な取り組みにもなっている。職員朝会を早めに終了できるように工夫し，担任が子どもにつけるように配慮している。

・間接指導は，まず直接指導をしっかりすることが大切。何を指導すべきかを明確に指示・掲示する。ワークシートの準備は毎時間は難しくポイントを絞って指導する。

・子どものアンケート結果から実態を把握しながら指導していく中で「算数ができるようになったと思う」子が増えたが，「楽しい」と感じる子が減っている。分かることに重点的に指導するため，上位の子は意欲的に満足できないのかもしれない。

・リーダー学習は全校体制では取り組んでいない。今後の課題である。

◇白老町立社台小学校の発表に関わって

・ノートチェックは指導後に行い，自己評価等をチェックし，次時に生かしている。

・算数的活動の時数確保は十分ではない。他の教師との協働体制で行っている。

・学習の流れが子どもに定着するようにリーダー学習を行った。リーダーは特別な存在ではなく日直がリーダーで進めている。学習に対する意欲化につながった。

◇両校にかかわって〈間接指導〉についての交流

・間接学習を活発にするためには，「わたり」の時の教師の発問が大事になる。間接指導に入る際の発問は「問題解決」につながる発問をする必要がある。

・間接指導を子どもが主体となって取り組むためには，子ども自身に単元の構造化ができていることが重要。また，学習過程(複式授業の４段階)を教師と子どもが共有することで間接指導が可能となる。各段階の時間が大切で１０分程度が目安となる。

・助言の概要

◇別海町立美原小学校に関わって

・算数科の基礎・基本について，活動のもとになるものと学習のもとになるものを押さえており良い。基礎・基本の定着を図るためのプリント学習は，計算力の定着が中心となっているが，表現力や思考力を育てるためのプリントも必要となる。

・研究仮説での１４の課題分析の視点はすばらしい。課題設定が問題解決につながるが，１４の視点を解決するときの子どもたちをイメージすることで，教師の目やスタンスが変わる。

・教材・教具の開発，工夫，改善をしていることは，子どもの思考を支えるために大事である。この工夫を，算数的活動と関連づけるとさらに活動が充実する。

◇白老町立社台小学校に関わって

・学校独自の算数的活動を明確に押さえているのがよい。

・問題解決を進める学習過程で自力解決の時間を確保しているが，自力解決→集団解決にプラス「ふりかえる場」を設定すると問題解決の一つとなり，間接学習を成立させる要素となる。

・算数的活動の中に「情報を集める活動」がある。今，算数の読解力が切り口となっており，活動に位置付けていることは大切である。

・間接指導はあくまでも教師側のものである。子どもが間接指導をどう受け止めているのかも大事である。学習の流れと子どもの思考過程の一体化を図ってほしい。

◇両校の発表に関わって

・これからの教育は習得型教育と探究型教育が両輪となるが，その上に「活用型教育」が重要となる。算数科では，「生活に生かす」ことが大切である。生活に生かすことで「確かな学力」を育成できる。具体的には，「言葉」と「活動」がキーワードとなり，思考力と表現力をどうつけるかが大切となる。

・数学的思考力と活動が大切である。低学年でも４領域を設けようとしている流れがある。それぞれの領域をどう関連づけて指導していくかが大切である。

（5）第２４回教育実践研究発表大会（平成２０年１０月２１日）

学校・学級経営実践発表

「自分の思いや考えを自信をもって表現し、学び合い、学び続ける子どもの育成」
～ 伝え合う場を工夫し、言語能力を高める指導の在り方 ～
発表者　日高地区　平取町立荷負小学校　教諭　窪　野　　力

・求める子どもの姿

◇思いや考えを伝え合い、理解し合う子ども
・意欲的に表現するために言語能力を高める。
・相手や目的、状況に応じて話したり聞いたりする。
・他者とかかわり合って学び、自分の考えを深める。

・昨年度までの研究課題

◇相手や目的を意識して話を聞き、自分の考えと関連付けて発言・発表できる場・機会の一層の充実を図る。
◇一人ひとりの評価を次の指導に生かし、担任以外の人たちの意見をもらい、より実践的な伝え合う力を培う。

・研究の内容

◇今年度の研究
・国語科を重点として、他の教育活動と関連付けながら、以下の内容について研究を進める。
◇研究内容１　音読、暗唱の学習活動の工夫（意欲的に表現するために）
・音読・暗唱を位置付けた国語の時間の指導過程の工夫
・一人読み、そろい読み、交代読み、役割読みなど音読形態の工夫
・「音読カード」を活用した効果的な音読練習のための家庭との連携
◇研究内容２　思いや考えを交流する場・方法の工夫（相手や目的、状況に応じて伝え合うために）
・「朝の集い」や「おはようタイム」の読み聞かせ、児童の実態に応じた「読書発表会」「本の紹介」などの読書交流の推進
・「体力づくり発表会」「地域学習発表会」など、各種行事等における発表方法の工夫
・インターネットなどのによる他者との交流など、情報活用の推進
◇研究内容３　個に応じた指導の工夫（考えを深めるために）
・ノート指導の工夫、学習シートの活用
・単元の目標・評価規準をもとに「個別の指導目標」を設定した評価の工夫

・成果と課題

◇音読・暗唱については、一人一人がめあてをはっきりさせて取り組んだことにより、作品の内容にあった表現方法を工夫できるようになり、言葉に対する興味、関心の高まりが見られた。
◇読書交流により、自信を持って自分の感想を述べ、友達の感想をしっかり聞けるようになってきたとともに、読書意欲も高まってきた。
◇指導内容を焦点化し、一人一人の評価と支援を適切に行うことにより、学習内容の定着が図られ、学習への意欲も高まってきた。
◇道へき・複連「７次長計」の課題４から見た成果と課題は、①日常の教育活動と密接につながった研究となった　②研修担当を中心に担任の枠を越えた「全職員で全校児童を育てる」雰囲気ができた　③少ない教職員のため、効率化を図った研究推進が求められる　などがあげられる。
◇指導案に「個別の指導目標・支援のポイント」「一人一人の実態に応じた指導・支援」

を明記することなど、研修全体を通して「個に応じた指導」を意識したため、適切な指導・支援が増え学習効果が上がった。
◇今後さらに、伝え合う力を土台に「互いに高め合い学び合える学級集団づくり」を目指し、相互評価の仕方の工夫、子ども同士の関わり合いで研究を深める必要がある。

・研究協議の概要

◇少人数を少しでも克服するために他校との交流学習・レク等が必要である。
◇色々な場面での実態把握が必要、放課後等で情報交流をしている。
◇基本が大切、くり返し音読や感想発表等を何度も人前で話すことで自信が持てる。
◇校内研修など少ない人数を克服するため、他校の集合学習や研修に参加した。
◇音読での成果は個人差もあるが、言葉に対するくいつきや慣れが国語に反映している。
◇経験不足の教員に、研究講座やベテランの授業参観・新任教育などを行っている。
◇国語に自信がない等の克服には、他校の視察や道研などの活用も有効である。

・助言の概要

◇音読、交流、個に応じた指導がしっかり回っている。
◇他の教科にも国語の言語活動が波及していく。
◇音読の成果について、求める子どもについてどうだったのかがあればなお良い。
◇いつも、いつでも先生方が気にすることのできるキーワードが大切である。
◇言語活動についても知識と習得・活用が必要。
◇評価者の少なさを克服するため、近隣の学校との関わりを持たせる等が大切。

学習指導 実践発表 1

「個々のよさを発揮し、互いを認め合い、共に生きる児童の育成」
～様々な表現活動を通して～

発表者　網走地区　上湧別町立開盛小学校　教諭　佐々木　寿　彦

・研究仮説

仮説１　児童一人一人の特性を把握し、個に応じた指導を工夫することによって、児童は自らのよさを磨き、いきいきと自分を表現するであろう。
仮説２　様々な人々や事象との出会いの場を効果的に設定することによって、児童は互いの違いを受け入れながら主体的に他とかかわるであろう。

・研究の内容

◇児童一人一人の特性の把握のための学力の要素・特別支援の観点による評価の工夫
◇個に応じた学習方法・表現方法の工夫
・学習環境（掲示物、掲示方法等）　・学習への動機付け（言葉かけ、ポイント制）
・学習展開（反復練習、リズム、アクティビティ）
・学習展開（一斉学習、グループ学習、個別学習）
◇活動における「人材や事象の出会いの場」や効果的な「活動の場」の設定の工夫
・学校外の方との出会い（保育園児、老人クラブ、地域住民、町内他校等）
・外国の方との出会い（ＡＬＴ、在日外国人、留学生、カナダ・ホワイトコートの訪問団）
・事象との出会い（日本伝統文化、外国の文化・習慣・物品、作品、自然、出来事）
・ＡＬＴとの英語活動（Ｅタイム）、カナダからの訪問団との交流活動
◇自己評価と相互評価の場の設定の工夫

・成果と課題

◇英語活動を苦手にしていた児童も落ち着いて取り組むようになり、ＡＬＴと積極的に関わるようになった。
◇児童同士の関わりも改善され、来客に対しても元気に挨拶する児童が増えてきた。
◇表現方法の基礎的技能習得とそれを意識した授業展開の工夫が必要である。
◇各教科等における表現活動の工夫や自己評価・相互評価の工夫を目指す。

学習指導 実践発表 2	「意欲的に学び、基礎・基本を身につける児童生徒の育成」 ～子どもの心が動く　おもしろくてわかる授業づくりをめざす取り組み～ 発表者　留萌地区　初山別村立豊岬小中学校　教諭　北　見　教　子
・目指す子ども像	◇学びを楽しむ子ども ・新しく知ること・できるようになること・創造すること・自力解決することに楽しみを感じ、「もっとやりたい」、「やってみたい」と学びを自分のものとしてとらえることができる子ども
・研究の内容	◇「学びの基となる力」の育成 ア　正しい日本語の力の育成 イ　単元で教える内容と１単位時間で教える内容の明確化 ◇「表現する力」の育成 ア　表現力育成ステップの作成 イ「表現する力を生かす場」の設定 ◇「学び方・学ぶ力」の育成 ア　学びのステップの作成
・成果と課題	◇子ども達の言葉に対する関心が高まり、発表する力や相手意識をもって表現する力をつけることができた。 ◇受動的な学びから能動的な学びを体現する子が増えてきた。 ◇発表する力だけではなく、聞く力も育てる指導の工夫。 ◇共同研究として深まりを追求することを目的とした研究計画や体制の工夫、改善。
・研究協議の概要	◇上湧別町立開盛小学校の発表にかかわって ・本校独自の学力要素表は、今回特に提示していないが、学ぶ段階として「つかむ、調べる、まとめる、伝え合う」という４つの内容から学校内で話し合って決めた。具体的な手立ては、各担任が個別に考えているので学校全体として決めていない。特別支援にかかわる基礎調査表は、大学名はいまはっきりとしないが文献から引用している。 ・特別支援では、本校ではかなりの割合で障害のある児童がいる。自立した生活をさせるために育てないといけない状況がある。全体の中で一人一人を生かし認めるような指導を進めていきたいという思いで進めている。また、外部との連携では、隣町の特別支援学校に支援してもらっている。児童観察や研修での対応の指導の仕方の学びをしている。保護者への説明もしてもらっている。他に児童相談所や、町内のケース会議など活用している。 ・指導目標や方法と特別支援との関係は、特別活動も国語もまだ入口で、どちらも言語活動が中心となる。英語活動も表現活動が中心となるので、今後も進めていきたい。 ・移行中の英語活動は、年間３５時間実施している。ALT が毎時間きている。英語ノートは拠点校なので、今年から実際に利用しながら検討を進めている。低学年は今までと同じようにやっていく。中学年は、３５時間は総合的な学習の時間だけでは厳しいので、これからどうするか検討していきたい。 ・仮説２の説明が、特別支援に関して不足しているのが残念である。他との関わり（全員）が大切なところである。全体構造図の中で、特別支援については、児童の実態の中に入れてもよいと思う。